

這いつくばって

へうげもの

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

以前Arcadiaで投稿していたものを少し変えたものです。

目次

適正 D	1
入学式	7
初戦闘	25
転校生	35
クラス対抗戦	47
学年別トーナメント	57
嘘つき	68

適正 D

朝、6時の練習場に一人の人間の足音が今日も音を立てる、

まだ、皆が寝ている時間に誰とも逢わない為に人類2人目の男でのI S搭乗者は人目を避けて努力を重ねる。

「・・・」

ただ、ただ無言で走る 口から漏れ出る音は空気を吐き出す音のみ。彼は世の男性から期待されていた。自分の父親や親戚の大人達、クラスメイトや学校の男性教師達、果てはI S学園に行く前には政治家達にまで激励されていた。

それほどまでに世の男性達は世界に二人しかいない男性搭乗者達に期待した。だがそのうちの一人——織斑一夏——

彼に期待する人はいても声高々に期待を掛ける事は国としては無理だった。なぜなら、彼には力では人類最強の守護者——織斑千冬 政治では人類最高の天災——篠ノ之束 国は織斑一夏に干渉しこの2人がもし敵になりまた白騎士事件みたいな事を起こされる事を恐れ彼には過度の接触をやめる事にし、何の後ろ盾も無いもう一人の方に期

待を掛ける事にした。

そして彼自身もその期待に答え様と頑張った。織斑一夏が動かさせたIS

その後に行われた全人類での男性によるIS適正試験、其処で唯一の成功例が彼だった。だが、彼は適正がD、乗れてもそれを自由に動かすこともましてや戦うことなど出来ない。

だけど、彼は頑張った。それは彼自身も自分を英雄と勘違いもしただろう。だけどそれもまた無理も無いことだ。

考えてみても欲しい。15歳の人間がたった二人の男性IS搭乗者になって期待されれば潰れない為にも自分が英雄と思つて自己陶醉しないとそのプレッシャーに潰れてしまう。そしてその期待に答えるために頑張った彼は……

壊れた。

これは、たった一人で世界の男性の為に頑張ろうとした一人の男の底辺でもがくお話。

くとある研究所く

キーボードを叩く音と研究者達の声が錯乱する場所。

その原因の人間である一人の少年はそれを聞きながら自分の人生が変わった事を確認していた。

「桐生君、何か変わったたり変な所、痛いところはな？」

少年に確認する研究者達、彼等は世界に2人しかいないIS搭乗者を研究する為に集められた研究者達、桐生浩太 彼が乗れる理由

その一つを知る為に彼の解剖以外は全て試そうとしていた。血液の研究

DNA情報 骨格 細胞 その全てに異常は無かった、正確にはISが乗れる理由が解らず研究者達は彼にあらゆる事を試して反応が出ることを祈るが

「はい。大丈夫です 何も変わりはありません」

反応があるはずもなく研究者達は報告書を作成し、国は彼にISでの戦闘技術を求め研究者達には彼のDNA情報から再生医療用の医療を求める方向で進む事になっていった。

「ふう」

膝に手を置き呼吸を整える。

少しは覚悟していたことであつた 世界で2人目の男性IS搭乗者世の男性の憧れ、

女尊男卑への切り札 僕はそんな事を皆から聞かされた。

だから僕はその為に今も朝から基礎体力トレーニング、昼は勉強、夜は戦闘技術や戦闘機シミュレーション 基礎体力は基本 勉強はISの事を知らないといけなくて、戦闘技術やシミュレーションは行き成りISに乗っても空に浮けないらしい、感覚が解らないのでISに近いもので訓練するみたい、

僕は基礎体力以外がIS学園入学者の中で最下位だった

「格好悪いな・・・」

口から自然と弱音が出る

「休憩はもう良いかい？」

「はい、次は何をすれば？」

「今日は、後5Km走れば、後は筋力トレーニングだね。」

「わかりました」

(頑張らないと。男だつて負けないんだ。)

適正がDしか無い僕は人の何倍も努力して少しでも入学前に追い付こうとこのトレーニングを繰り返して頑張つて追い付かないと。

多分、もう一人の男の子も努力しているだろうし。

（首相官邸）

「これが、彼の報告書かい？」

一人の男が報告書を持ってきた男に目線を報告書に向けたまま問い掛ける

「はい」

「動かせることは出来るけど戦えば負けると？」

「はい。動かすことも適正はDなので、自分の思うようには動かせないかと」

「なるほど、構わない、今のままでいい、再生医療の方は進めて今のままでいい。」

（彼には悪いが私の為にいや男性の為に頑張つて貰おう。）

「やはり、適正Bの織斑一夏の方がいいのでは？」

「駄目だ！ 彼に手を出せば白騎士、そして天災がまた何かをしてくる。忘れたのか？

あの忌々しい事件を・・・

自分の研究の為にミサイル基地のコンピュータを一斉にハッキングし

2341発以上のミサイルを発射するという最大の暴挙をしたんだぞ!!」

（私は許さない・・・自分の為にあんな暴挙を・・・）

「今度は何をされるか、それに彼の報告書を見たが彼はこちらから接触しなくてもいい。

勝手にこの女尊男卑の世界を壊してくれるだろう。」

何せ、報告書を見る限り「守る」ということに執着しているんだ。姉を守る、友達を守る。さらに適正Dの彼よりも才能がある。

いい旗頭になるさ。」

（すまないね。桐生君、世間では君が期待されているが織斑君の為に壁になり男性の為に壁になってくれたまえ・・・その代わり私はあの天災

を捕まえ、世界を元に戻す。その為に君の人生を）

そんな事を考えているとは思わず、僕は入学までずっと訓練と勉強で入学まで過ごしていた。

入学式

（I S 学園）

春に相応しく暖かな風に揺られ入学を迎える

「ふう〜。やっと終わった」

入学式の間ずっともう一人の男の子と一緒に視線を感じ落ち着かない時間を過ごすのは精神的にきつかった。もう一人の男の子も同じだったと思う。

感じる視線が友好、興味、敵意、同情等必ずしも良いものじゃ無かった。

「全員揃ってますねー。それじゃあS H Rを始めますよー」

考えに集中していたらそんな声が聞こえて顔を上げるとにっこりと笑顔で微笑み黒板の前で挨拶していたのは僕の担任の先生になった山田麻耶先生、身長は低く顔は童顔で僕達に混じっても違和感が無く可愛い感じの先生。

服装もそれに合わせているのか可愛い感じの服装をしている。

「それではみなさん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」

(挨拶ぐらいしたほうが…)

女性陣は挨拶よりもたつた二人の男性、男子、織斑一夏、桐生浩太の2人に釘付けになっていた。

「……織斑くん。織斑一夏くんっ!」

山田先生に目の前で大声で呼びかけられたのがもう一人の男の子織斑一夏君。

「は、はい!」

考え事していたのか声が裏返っていたので周りからクスクスと笑い声が聞こえてくる。織斑君って結構面白い人なのかな。後で話しかけてみようと思っていると

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる? 怒ってるかな?」

「ゴメンね、ゴメンね! でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。だからね、ご、ゴメンね? 自己紹介してくれるかな? だ、ダメかな?」

と山田先生が涙目になりながら織斑君に頼んでいるけど山田先生 先生なんだからそんな低姿勢じゃなく普通に頼んでも大丈夫なんじゃ無いかと、

「いや、あの、そんなに謝らなくても……ってどうか自己紹介しますから、先生落ち着い

て下さい」

「ほ、本当ですか？ 本当ですね？ や、約束ですよ？ 絶対ですよ!」

涙目のまま山田先生は織斑君の手を取り詰め寄っているけど

山田先生。これ自己紹介ですよ。まるで織斑君がイジメているみたいですよ。

「えつと、織斑一夏……です」

皆、織斑君に期待の眼差しを向けてますね、これは僕の時もこの眼差しを向けられるのでしょうか。織斑君の挨拶を参考にするためにも僕も集中して織斑君の自己紹介を聞いと思うってジツと集中していると

「以上です!」

其処にお約束の用に織斑君の頭に黒い物が風を切る音と共に乾いた音が流れ織斑君は頭を抑えながら

「げえつ、関羽!」

「誰が三国志の武将だ! !」

おおゝ 織斑君。今度は先ほどとは違う重い音が織斑君の頭に綺麗に叩き込まれていた。織斑君体を張ったボケなのかな？

今の出席簿での叩き方も何か凄い速さで痛そうだったけど大丈夫かな

「織斑先生、もう会議は終わられたのですか?」

「ああ山田先生。クラスへの挨拶を押し付けてしまつてすまなかつたな」

「い、いえつ。副担任ですからこれくらいはしないと……」

山田先生。それは織斑君に無視されかけて涙目になつていた人の言う事じゃないかと

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らつてもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

織斑先生 ここは今日から軍隊なのでしようか？ でもISっていう兵器を教えるならこれぐらい当たり前なのかな？ 確かに危険だし1年しか無いなら厳しくても当たり前前かなと納得していると

クラスの女子たちが途端に黄色い声を上げ色めき立つ

ISに乗れる女性なら誰もが憧れる女性織斑千冬先生

第一世代IS操縦者の元日本代表で公式戦無敗。しかも第一回ISの世界大会——
—モンド・グロツソの格闘部門及び総合優勝者

そんな事を考えていると頭に鈍い

「つつ」

頭に鈍い痛みと共に声が漏れて

「私の言う事は聞けと言ったはずだ。早く自己紹介をしろ」

どうやらいつのまにか僕の番なのに無視をしていたらしい

「桐生浩太と言います。趣味は読書と音楽です。よろしくお願ひします」

そうして自己紹介を終わりHRも終わると僕は早速、織斑君の席に行つて声をかけ仲良くなろうと行動を起こす前に一人の女の子に連れて行かれちゃった。仕方ないので少しでも授業についていくために入学前に貰った参考書をもういちど読んで時間をつぶすけどやたらと視線と空気が重い。これはやっぱり男が少ないからなのかな。でも仕方ないよね、少しでも男の強さを取り戻すためには我慢してついていかないと

「——であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によつて罰せられ——」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生、そしてノートに取っているのかノートに文字を書いているような音が複数聞こえる、もちろん僕も書いている。僕や織斑君はここに連れて来られたような物だろうけど女性にとつてはここはエリートだろうしそれに相応しいようにみんな勉強家みたいだ。

ん　織斑君はなんでそんな泣きそうな顔でいるんだろう。

取りあえず僕は前を向いた方が安全なので前を指差すように合図を送るけど全く向かないね。織斑君、ここには山田先生以外もいるんだよ。

「そこ二人。何をしている」

（終わった・・・）

「お、織斑君。今の場所で分からない場所がありましたか」

「はい」

「どこですか？なんでも訊いてくださいね。何せ私は先生ですから」

（妙に先生嬉しそうですね・・・）

山田先生もしかして頼られるのが嬉しいとかですか？

その証拠に胸を張りながらにこやかに織斑君に尋ねているけど

「ほとんど全部分かりません」

次の織斑君の答えで笑顔が物凄く困った顔に変わり周りの皆も少し戸惑いながら何故か僕のほうにも見ている人が何人か。僕は少しは理解していますよ。全部は無理ですが

「ぜ、全部ですか・・・えっと、織斑君以外で今の段階で分からないという人はどれくらいいます？」

誰も上げないというよりここら辺は入学前に覚えているのが当たり前な空気に

「桐生君は大丈夫ですか？解りますか？」

「入学前の参考書を読んでいたので少し位なら大丈夫です」

織斑君そんな絶望したみたいに顔を下に向けて手を握り締めないで下さい。皆さんも何で空気読んでないみたいな顔を。読んでくるのが当たり前じゃ無いんですか・

「織斑。入学前に渡されたI Sの参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

その言葉と同時に今日三度目の出席簿アタックが轟音と共に織斑君の頭へ直撃していた。織斑先生、手加減という言葉知っていますか？今の音は普通の人なら出血してますよ。

「ツツツ」

織斑君は余りの痛さに声に鳴らない声が漏れていますね。周りは大爆笑ですが何で大爆笑何でしょうか？逆に読まない方が可笑しいですよ

「必読と書いてあっただろうが、馬鹿者。織斑、再発行してやるから一週間で覚えろ」

そういった後、織斑先生は此方を向き全員を見渡しながら

「I Sはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器をはるかに凌ぐ。その《兵器》を深く知らなければ、必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解しなくても覚えろ」

(織斑先生良い事いうな)

「いいか IS は兵器だ。兵器を半端な考えで使う事は許さん。全員完璧に理解して使え。無能な味方は敵より厄介だと覚えろ。」

「織斑は放課後、山田先生と補習しろ。理解するまで覚えろ。反論は許さん」

(怖いけど言ってることは正しいよね。ISは既存のどの兵器より優秀なんだからそれを使おうとすればちゃんと理解しないと)

織斑君絶望しないでちゃんと頑張つてね、これは当たり前前の事なんだから逆にちゃんと覚える努力してなかったんだね・・・

次の休み時間

やつと僕は織斑君に話しかけようと少し俯いている織斑君に声をかける

「織斑君、ちゃんと参考書読んでこないと駄目だよ」

少しへこんでいる織斑君を元気付けようとしたけど言うことは言わないとね

「ああ。今日から補習だから頑張るよ。」

「そう。僕は、桐生浩太つて言うんだ。宜しく」

「織斑一夏だ。よろしく頼む。桐生」

うん。良かった。男子二人だし、仲良くしたいもんね。

「ちよつと、よろしくて?」

「え? (は?)」

いきなり知らない人に声を掛けられ振り返ると鮮やかな金髪に青色のカチューシャを付け淡い青色の瞳でこちらを見つめる女の人、確か自己紹介の時にセシリア・オルコットさんと言つてた気がする人

えゝつとなんでそんな機嫌悪そうにこちらをみているのかな。

「織斑君、呼んでるよ」

「一夏でいいよ。桐生を呼んだんじゃないのか?」

「僕も浩太でいいよ。僕じゃないと思うよ。さっきの休み時間も誰かに呼ばれていたしこの人もそうなんじゃないかな?」

とぼくは一夏にこの女の人を任せて逃げようと

「わたくしに話しかけられることだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんではないかしら? 全く挨拶すら返せないとはこれだから男は」

延々と続きそうだけどここの人は何がしたいのだろう。ISが女性しか使えないと世界の常識ができてから何故か女性の人が急に偉そうになった。コンビニで買い物をするようにと外を歩くだけで見ず知らずの女の人にお金を頼まれることも偶にある。世の中の出世とかも女性が優遇されているらしい。その証拠に政治家も女性のほうが当選

数が増えたらしい。僕は母さんも学校の先生も普通だったのであまりこういう偉そうな女の人に余り逢った事が無いので苦手なのでどうすればいいのかな

「悪いな。俺、君の事知らないし」

（知らないの?）

「僕は知ってるよ。セシリア・オルコットさんだよ。確か入学式の時にも挨拶してた入試主席の」

「私を知らないといえますの? この、セシリア・オルコットを? イギリスの代表候補生にして、そちらの方が言った通りの入試主席のこの私を!」

（凄い自尊心だねオルコットさん）

「うん。知らない」

「代表候補生って凄いねオルコットさん。」

「あのさ、代表候補生って何?」

（一夏。人が折角話を沈静化しようとしてるのに何で火に油を注ぐかな。代表候補生ぐらいそのまま解るだろう。）

「代表候補生とは国の代表を選ぶ為の候補生だよ。オリンピックのマラソンとかで出てくるのとは意味は一緒だよ。ようするに国を代表するからエリートだね。」

「そう。そちらの方が言う様にエリートですわ。男でISを操縦できると聞いていま

したけれど、期待外れですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが……」

「まあでも、私は優秀ですから。貴方のような人間にも優しくして差し上げますわよ。解らない事がありましたら、泣いて頼まれれば教えて差し上げても良くつてよ?」

「何せ私、入試で教官を倒した唯一の一人ですから。そう、エリート中のエリートなのですわよ」

「あれ?俺も倒したぞ、教官」

はい?? 一夏 教官倒したの? 僕は何も出来ずにただ倒されただけなのに。

「一夏 それ本当? 本当に教官倒したの?」

「倒したっていうか……、避けたら壁に突っ込んでいった。」倒したっていうか……、避けたら壁に突っ込んでいった。

(教官の人何をしているの。)

「わ、ワタクシだけと聞きましたか?」

「一夏のは倒したといわないし、オルコットさんだけが厳密に言えば倒したと言えるんじゃないかな?」

「女子ではってオチじゃないのか?」

「一夏!?!」

（バカ。そんな事を言えば。というより一夏のは倒したとは言わないよ）

「あなた、あなたも教官を倒したって言うの!？」

顔を真っ赤にするオルコットさんが此方に詰め寄りながら言葉を掛ける。入学主席で唯一教官を倒したのが自分だけと思っている所へ大したことが無いと思っていた男が自分も倒したといい更には自分の事など知らないと言われれば。うん 辛いね。一夏もクラスメイト位知ってようよ。

チャイムの音で二人の会話も何とか終わり周りでは席に着きながらも此方の会話を伺っている皆気になるのかな？ 男性 I S 搭乗者を。

僕も女性 I S 搭乗者が気になるけど皆がオルコットさんみたいな人ばかりだと辛いね。心のどこかで男性を見下しているって事だし。この I S 学園にいる間に少しでも男の人もやれるって事をみせるんだ。

「話の続きはまた後で、よろしいですわね」

（まだ話すことがあるんだね）

「それではこの時間は、戦闘における各種装備の特性について説明する」

三時間目に教壇に立つのは織斑先生だった。クラスの皆もさつきよりも幾分姿勢を正して授業を聞く体勢になっている。流石織斑先生

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」
(代表者?)

「クラス代表はそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会が開く会議への出席・・・
クラス長だな。一度決めたら一年間変更はないからそのつもりで」

はい?? 再来週?? まだ入学したばかりですよ?? ISまともに乗れる人の方が少ないですよ?? 専用機持ち全クラスいるんですか??

まこうちのクラスは代表候補生候補のオルコットさんでしょうね? 入学主席これ以上の人はいないでしょう

「はい、織斑君がいいと思います」

(何を言ってるんですか?)

「では候補は織斑一夏。他にはないか? 自薦他薦は問わないぞ」
(織斑先生 何を言ってるんですか?)

「つて、俺え!」

一夏もそりゃ焦りますよね。

「織斑、席につけ。邪魔だ。さて、他に居ないのか? いなければ無投票当選だぞ」

(いやいや、それは駄目でしょ織斑先生。フザケすぎです)

「セシリア・オルコットさんを推薦します。」

そうセシリア・オルコットさんしか有り得ない。ISの強さはIS稼働時間に比例すると言われてる。なら代表候補生のオルコットさんならIS稼働時間はこのクラスの誰より多いはず、当然オルコットさんの戦闘を見るだけでも僕の訓練になる。僕と一夏はまだISの経験が圧倒的に足りないんだから見る事が出来るだけでも良い経験だ。

「桐生君を推薦します」

(何で僕までみんなふざけすぎだよ)

「織斑先生。誰が考えてもセシリア・オルコットさん以外有り得ないと思うんですが？僕も織斑君もIS稼働時間が1時間もありません。それに対してオルコットさんは代表候補生なので稼働時間がこのクラスよりも高いはず。さらには入試主席なのでオルコットさんの戦闘を見るだけでも勉強になります。逆に僕等の戦闘を見ても誰の勉強になるとも思いません。さらに生徒会への出席なども僕達はこのIS学園の勉強に付いていくだけで必死なのでクラス代表になる余裕が無いのでオルコットさんに頼みたいと思います。」

そう僕と一夏にはそんな余裕など無いはず。少しでも早く強くならないと。

「そうですは。そちらの方の言う様に男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！

このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

いやオルコットさん それは言い過ぎじゃないですか？

「大体、文化としても後進的な国に暮らさないといけない事自体、ワタクシにとつては堪え難い苦痛で」

オルコットさん、それは言い過ぎだよ。代表候補生なら発言に注意しないと一夏も睨まずに我慢してやり過ぎさないと

「イギリスだつて大したお国自慢ないだろう、世界一まずい料理で何年覇者だよ」

一夏……ここで発言しても意味が無いんだよ。僕等が強くなってI Sの優位性を無くして発言しないと変わらないんだよ

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの!？」

「先に侮辱したのはそっちだろ！」

(ダメだ、完全に頭に血が上つてる 落ち着かせないと)

「一夏、落ち着きなよ。オルコットさんも落ち着こう。お互いの国を侮辱するのは良くないよ。クラス代表もオルコットさん「決闘ですわ!」に、何を言つてるの?」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい「バカ!!」浩太」

「一夏、僕の言う事を聞いてなかったの? 代表はオルコットさん以外あり得ないし僕達じゃまだ勝てないんだよ。」

「そんなの解んないだろ。浩太はここまで言われて悔しくないのかよ。」

男だろ!？」

『桐生君ちよつと格好悪くないく情け無いよね。』

「別に悔しく無いよ。勝てないのも事実だからね」

（そう、僕は I S に乗る力がある I S に乗れずに悔しくそれでも歯をくいしばってこの世界を変えようとした人達に比べれば僕達は恵まれてるのにそれに比べれば何と言われようと）

「それに戦ってどうするの？僕達は専用機も無いしちゃんと乗る事も出来ない。乗るだけ無駄だよ、なら戦闘を見て勉強する方が無駄にならない僕達に無駄な時間は無いんだよ。」

「専用機なら織斑はある。それと桐生、私は自薦他薦は問わないと言った。覚悟を決めろ。」

（僕は専用機ない気がするんですが。ただ殴られて沈めと?）

「あら、貴方は専用機ありますのね、良かったですわ。貴方も決闘ですわよ。私がその情け無さを鍛えて差し上げますわ」

（大きなお世話だよ。僕の専用機が無いのはノーコメントなんだね）

「織斑先生。決闘は解りました。最後に質問です。専用機持ちは全クラスいるのでしょ

うか？」

「話はまとまったな。それでは、勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナにて行う。それと専用機持ちはこの1組に2人と4組に1人だ。」

「解りました。」

何で4組の人は1組じゃないんだろ。1人だけ他のクラスに送るより1組に3人入る方が訓練もしやすく専用機持ちなんだから適正は高く稼働時間も長く4組で実力が浮くはず。クラス代表の為？

なら一夏かオルコットさんも別れるはずだよ。何か一緒に出来ない理由が？さっきの織斑先生も無理矢理戦わしたいみたいと感じたし何かあるのかな？ISは兵器と言いながらちゃんと覚えてもいない一夏や僕をオルコットさんと戦わす。勝てるわけも無いのに。まるで負けて欲しいみたいに。

負けて欲しい？ 負けて男はやっぱ弱いと確認？でも一夏は織斑先生の弟。弟を危険にさせるのかな？いや一夏は専用機があるんだっけ うくん解らないな兵器といいながらちゃんと教えずに行き成り戦闘 いくら絶対防衛があつてもエネルギーが切れて落ちれば怪我はすると思うんだけど。 情報が少ないからもう少し情報を集めてから考えようかな。

今は一週間後の試合を考えよう。少しでも乗れるようにまずはラファール・リヴァイ

ヴの使用申請を出しとくかな。一夏はどうするかな。一夏は何のためにISを乗るんだらう？

初戦闘

「織斑先生、来週の試合、棄権したいのですが」

僕は来週の試合を棄権するために、放課後織斑先生を探し声をかけていた

「桐生、私は自薦他薦は問わないと言った。」

「試合にならないと思うのですが？それに僕は専用機も無いのに尚更意味がないかと」

「桐生、専用機が無くても強いものは強い。お前も諦めずに戦ってみろ」

「そう言い残して織斑先生は去っていった。」

翌日の朝からまだ、完全に日が昇りきっていない時間、黙々とグラウンド走つていき、そうして目標の距離を走り終わった後最後の1週をゆっくり歩き息を整えた後に次は許可の下りた地下の射撃訓練場でライフル射撃を行う両足でしっかりと立ち射手の右頬をストツクの一定の位置に密着させバットを右肩のくぼみに正確に当てる。右肘の位置は射手のバランス調整。人差し指を引き金に、残る指はグリップ（銃把）をしつかりと握る。入学前の訓練で何度も何度も繰り返し教えられた撃ち方を今日も復習しながら繰り返す。一発撃つ度に大音量と反動で照準がずれるのを直しながら一定の間

隔で練習をし一日の朝が終わり食堂へ向かう

食堂で彼に向けられる視線が友好的では無いのは昨日のやり取りが広まったのか蔑みの視線が大半、なかには聞こえるように蔑みの言葉をなげ掛ける者までいる。その全てを彼は無視して食事を取る。彼はそんな視線など気にしていられないとばかりに食事を早く終わらせようとしていると。

「なあ、昨日の事は悪かったって」

「解っている」

「だったら何で怒っているんだよ」

「怒ってなどいない」

そんなやり取りをしている方向へ顔を向けると一夏と長いポニーテールと凛々しい釣り目をしている篠ノ之箒さんがいた。仲良いなと思つて食事を再開していると。

「おつ、浩太。お〜い！」

「おはよう。一夏。篠ノ之さんもおはよう」

「おはよう」

「() () いいか？ 浩太」

「良いけど、僕はもう終わるよ」

そう、残りももう終わりそうなのだけど、それを聞いた篠ノ之さんは少し嬉しそうな表情になり

「そうか。まあいいや。ここでいいだろ。箒？」

「ああ。かまわない」

そして。箒は桐生の方を睨むように顔を上げた。

桐生は昨日のことで睨まれていると思いきや早々と席を離れようと食事を再開し3人揃って食事を取るのだが空気は重く会話も無い・・・原因は箒が出す不機嫌オーラなのだ。だが昨日のことだけでここまで不機嫌になるのか、それとも他にも理由があるのか解らず。係わり合いになるのも嫌なので、残り少なかった朝食を急いで食べて。

「先に行くね」

2人に声をかけて桐生は早々と席を離れて行った。

休み時間

先ほどの授業の影響で隣通しに座る一夏、桐生、両方ともグツタリと精神を消耗していた。一夏に話しかけたい女性人も躊躇うほどの消耗振りに皆が遠くから眺めるだけ

の状態。その原因が先ほどの副担任の山田真耶先生の授業。此方からの質問も解りやすく説明して行ってくれたのが。

「というわけで、ISは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアーで包んでいます。また、生体機能を補助する役割があり、ISは常に操縦者の肉体を安定した状態へと保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィンなどがあげられ——」

「先生、それって大丈夫なんですか？　なんか体の中をいじられてるみたいでちよつと怖いんですけども……」

「そんなに難しく考えることはありませんよ。そうですね、例えばみなさんはブラジャーをしていますよね。あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響が出ると言うことはないわけです」

授業内容を書き取っていた桐生の手が止まり顔を上げる。

「もちろん、自分にあつたサイズのものを選ばないと、形崩れしてしまいますが——」

そこで、山田先生の説明が止まり桐生と目が合い。

「え、えつと、いや、その、桐生君はわ、わからないですね、この例え」

「……はい」

この用にI S学園は今まで女子だけだったからなのか女子同士特有のオープンな内容がたまに発生し一夏と桐生の精神を容赦なく削っていき二人の学園生活は中々に辛いものが起こる。

そんな日常が過ぎ、週が明け。

今日は1年1組のクラス代表決定戦の日。第三アリーナに集まった一夏・桐生・オルコットの3人まず最初に戦うのは1試合目が一夏対オルコット・2試合目がオルコット対桐生・

3試合目が桐生対一夏になった。オルコットさんと一夏は専用機があるので最初で代表候補生なのでオルコットさんは休憩なしでの連戦という風になり、僕は自分の番が来るまでモニターも無い場所で待機になった

「織斑先生、流星に情報位みないと対策立てれないし、僕が見ても変わらないと思うんですが？」

「私もそう思う、だが公正を保つためにも貴様にだけ対戦をみして情報を与えることはできません」

そう言われてはどうしようも無い。

別室待機すること数十分。一夏とオルコットの試合が終わり。別室に待機しだしてから緊張と恐怖で一杯になった桐生を迎えにきた山田真耶は先ほどから。

「まだI S操縦は2回目なのに、セシリアさんのビットをブレイドで切り裂いた。織斑君の操縦技術は凄い……」

等々、よほど良い試合だったのか熱い口調で語っている。対する桐生はそんな話など聞いていなくしきりに手を握っては離し緊張と恐怖と戦っている。入学して1週間やれることは全てやったがそれでも100%負ける試合を無理矢理やらされるのだ。彼はビットに到着しラファール・リヴァイヴを装着し感触を確かめる。

『武装を選んで下さい』

アサルトライフルとグレネードを選びインストールする。彼は時間が無くて他のを覚える時間が無く一番凡庸性のある主力小銃アサルトライフルのみに覚える時間を割いた。適正Dの彼なら複雑な操縦と反射神経のいる格闘より基本的な姿勢で連射の出来る銃撃の方がいいと判断されたのだ

「準備はできましたか？」

「はい。出来ました」

「では、ゲートを開きます。頑張ってください」

その声と同時に桐生はアリーナへ飛び出した。

アリーナへ飛び出した桐生はフラフラしながら何とか辿り着き、空に浮かぶブルー・テイアーズを纏うセシリア・オルコットを見ながらこの独特の空気を何とか耐えようと心を静める。周りからの罵声も耳にする余裕も無い。今は自分の少しでも自分の被害を減らしてこのラファール・リヴァイヴの操縦を長くし操縦に慣れようと、考えていると。

「桐生さん。準備はよろしいかしら？」

その声は優しいが桐生を見る目はまるで人じゃなく虫を見るような目つきで。

「うん、大丈夫。始めよう」

桐生はそんな視線を無視して目の前に集中しようと声を発する。

セシリア・オルコットは今まで感じたことのない不思議な興奮にあつた。今まで自分の知っている男は婿養子という立場の弱さから母親に対し卑屈になる父親等の女尊男卑当たり前の世界だった。それが、先ほどの試合で織斑一夏は最後まで諦めず自分に向

かつてき自分の求める「理想の男」を見た。だが、彼女はまだその気持ちに自分で気づいていない。ただ彼に逢いたいとしたか。

セシリアは開幕から早く勝負を決めようとスターライトmkⅢのレーザーの照準を桐生に合わせ引き金を引き巨大な特殊レーザーが桐生の乗るラファール・リヴァイヴのシールドエネルギーを容赦なく削り取る。対する桐生も回避しようとスターライトmkⅢの射程外へ逃げようとするが。

「逃がしませんわ!」

逃げる。レーザーライフルを構えたセシリアの射出口から来る場所を特定しようとしてもこの雨のように発射されるレーザーには全く効果が無く無常にもシールドエネルギーが減って行くのを待つばかり

「(どうしよう。交わす事もできないし、かといって前に出ることも)」

考えてる間にも桐生には雨のようにレーザーが迫り彼は何とか直撃を防ごうと腕の前に出すのが精一杯の状況でも桐生は何とかしよう。武装を展開する。右手に現れるは彼が唯一使えるアサルトライフル。彼は今も自分に降り注ぐレーザーの雨を無理矢理被弾しながら進み、ただ自分出来る唯一の攻撃をアサルトライフルで行おうと照準を合わせ引き金を引くが。

「動きが遅すぎますわ!」

それでも。それでも。桐生にはこれしか出来ない。完璧に操縦することが出来ない桐生には愚直にも照準を合わし引き金を引いてセシリア・オルコットを狙う事しか。だが、セシリア・オルコットがいつまでもそのような行動を許すわけもなく彼の照準が合う前に移動し、逆に彼が照準を合わせようと立ち止まっている所へスターライトmkⅢのレーザーを撃ち彼のシールドエネルギーを減らし。

「ああっ!!」

意識が攻撃にいきレーザーが直撃し右手の装甲が落ちたのと同時にアサルトライフルを落としてしまう。

「あなた・・・やる気ありますの?」

セシリア・オルコットが話しかけるが桐生の恐怖は最高潮に達していた桐生は話を返す所か話を聞いていない。また、セシリア・オルコットも桐生が一夏と違って卑屈な人間と思っていたのでさっさと倒して一夏に逢おうとしたためにブルー・ティアーズを展開し一気にシールドエネルギーを0にしようとした彼の死角から4基のレーザー攻撃を真正面から2期のミサイルを彼に向けて放った瞬間に。

「降参し・・・」

桐生はもうアサルトライフルを落とし自分のやれる事が無いのと初めての戦闘での恐

怖で降参しようよと 開放回線（オープンチャネル）で降伏しようよと宣言すると同時に着弾し爆音と共に煙が出て彼の姿を隠し試合終了のブザーが鳴り。

『試合終了。勝者——セシリア・オルコット』

その宣言が成されると同時に彼は地上に叩きつけられ、気を失い、スグに保健室に連れて行かれ3試合目は中止という事態に陥った。

転校生

体中の痛みで目を覚まし周りを見渡すと知らない場所で、周りを確認していると

「あら。目を覚ましたわね。余り動かないほうがいいわよ。全身に強い衝撃を受けての打撲と右肩が亜脱臼していたから」

声を聞こえる方を痛みを我慢して振り向くと一人の女の先生が声を掛けてきた。

「だから全身が妙に重くて痛い感じがしたんですか」

痛みで声を出すのも辛そうに返事を返し。

「幾ら絶対防衛があるといつても衝撃全て吸収するのは無理だからね。でも、桐生君も試合で意識失うのは駄目よ。あの高さから落ちるのは危ないわよ」

「どうやら試合中に意識を失ったらしい。そういえば降参しようとしたら最後に後ろからの衝撃と目の前からミサイルが来てあまりの痛みにそこから覚えていない。もう、やっぱりまだ早かったな。さっきの試合を思い出そうとすると体が震える。よく死ななかつたけど行き成り死に掛かるとは。」

「はい……すいません。あの僕はもう部屋に戻っても？」

痛む体に鞭打って部屋に帰ろうと立ち上がろうとすると。

「ダメよ。あなたは1週間ほどここで入院よ。大丈夫このI S学園は世界中のI Sのエリアートが入学してくるの。その子達を3年間治療するために医療技術は世界でもトップレベルだから安心して。貴方は全身打撲なんだからせめて体を普通に動かせるまで回復しないとダメよ。」

理路整然と言っている事は解るが僕にもこの戦闘を復習したりオルコットさんの武器や戦い方を覚えてる間に纏めたいので

「解りました。ならI Sの教科書と参考書、後ノートを取ってきて貰ってもいいでしょうか?」

「解ったわ。」

そういつて先生は僕の部屋に向かう為に出ていき。僕は先ほどの戦闘を振り返る。といつても僕はオルコットさん相手にただ、逃げることも戦うことも出きず。無様に落とされ、最後には降参することも出来なかつた。

「くっ!?!」

悔しくないわけが無い。無駄に時間を過ごして今日の試合を迎えたわけじゃない。負けるのは解っていたし。通用しないのも解っていた。でもそれは頭で理解していた事で感情は悔しさで一杯だった。その悔しさから漏れ出た言葉に鳴らない音と一緒に

シートに零れる水滴は一寸の間続き、我慢しようとすればするほど音は止まず涙は溢れても、彼にはどうしようもなかった。恐怖に震え悔しさに歯を食い縛りそれでも、彼は頑張ろうと自分の気持ちを落ち着けようと呼吸を落ち着け。先生が帰ってくるのを待った。そう、たった一人彼の悔しさと恐怖に震える慟哭をドアの向こうで黙って静かに聞き彼が落ち着くまで入らず、今も彼が聞かれている事すら知らない用に声を掛け。

「持ってきたわよ。教科書と参考書。ノートはこれでいいかしら？」

「はい。大丈夫です。ありがとうございます」

ノートを受け取り早速先ほどの戦闘でのオルコットさんの軌道、武器、そして自分で気づいた改善点を書いてみると。

「桐生君、少し質問いいかな？」

「・・・なんですか？」

ノートに書くのを止めて顔を上げて先生を見つめると。

「桐生君、適正Dだよな？どうして毎朝走ったり、放課後もラファール・リヴァイヴの許可を取って操縦練習していたよね？確かに桐生君は男性操縦者だから学園に22機しか無いISも放課後は優先して回せるけど、ハッキリいうと適正Dの桐生君はどんなに練習しても勝てないよ。それほどIS適正っていうのは違うよ。それでも今の努力を続けるの？」

「・・・それでも・・・それでも僕はISに乗れるから・・・他の人は乗れなくて悔しくてそれでも頑張つて何とかしようとしても出来ない・・・けど、僕はそのチャンスを貰えたから。だから、そんな人達と比べれば適性Dでも諦めれないんです！それに織斑君もいますし。」

「たとえ、この先君は誰にも勝てなくても？全てのIS操縦者から蔑まれ世の男性達から怒りをぶつけられているかもしれないのに。それでも君は今みたいに頑張れる？」

先ほどとは違う声の硬さ、真剣な表情で僕に問い掛けられる。確かに僕はIS操縦者で一番弱い。適正も低い。けど、そんな事は今更だ。それでもやると決めただ。確かに恐怖でさつきまで震えていたけど先生と話してると思い出してきた。僕がやりたいと思っていた事を。

「今も蔑まれている事は同じです。怒りをぶつけられるのだから入学前の訓練中にだつてありました。でも、一緒に頑張ろうといってくれた人も居ました・・・こんな世界じゃないけないと。女性だから男性より偉いんじゃないと。だから僕がISに乗って誰よりも強くなり!!能力があるから偉いんだと。男性だってやれるんだと証明するんです。」

そう、証明したい。だから僕に出来るのは努力だけ。それに僕は一人じゃない。織斑君と二人で努力すれば。

「そう。でも、今の君に出来るのは寝るだけよ。大人しく寝なさい。」

そういつて。先生はまた出て行った。何でそんな投げやりな言葉だけ投げ掛けて。でも、先生と会話して大分気持ちの整理出来たな。ここにきてずっと緊張の連続だったしさらに今日は試合までしたし、先生の言う通り少し寝よう。

「・・・居なかったわけじゃないのよ。桐生君みたいな考えを持った人は・・・」

「織斑先生。彼なら寝てますよ」

「鈴木先生。桐生の容体は？」

担任の織斑千冬は保健室から離れた廊下で保険医の鈴木幸恵から桐生浩太の容体を聞く。

「全身打撲と右肩の亜脱臼です。1週間ほどここに入院すれば日常生活なら何とか戻る感じですね。全身打撲がどれほどかは解りませんが」

「そうか。ふう、全く心配をさせる」

織斑千冬はそう溜息を吐きながら心配したように口を開くが。

「織斑先生。本当に心配したんですか？彼は試合で負傷したと聞きました。しかも対戦

相手は代表候補生のセシリア・オルコット。一体何でこんな試合を？彼が負けるのは解りきっていたのでは？」

「・・・負けることは解りきっていた。危険な事も。それでも乗せるしか無かった。彼に I S としての戦闘力が無いことを上に見せ付けないと」

「どういうことですか？」

「桐生はこの I S 学園に居る間は安全だろう。彼には自衛隊や政府の一部も接触しているがそれはあくまでも一部。今の女尊男卑の世界で彼を守れると思うか？」

「それは!？」

「無理だ。だからこそ上に彼が戦闘力も無く放って置いてても危険が無いと教えないといけない。彼はこの3年間地獄だろう。それでも、それでも死ぬよりはマシなはずだ！」

「それで無理矢理試合を受けさせたのですか？貴方の弟と一緒に」

鈴木の声がどんどん冷たく口調が硬く変わっていき織斑千冬を問い詰める

「彼に戦闘力が無いと解れば逆に彼にはモルモットの人生しかありませんよ。それこそ死ぬほうが楽な用に」

「それでも、死ぬよりはマシなはずだ」

織斑千冬も彼女なりに桐生の事を考えていた。彼女は I S で強いという事が解っていた。彼女は強すぎるが故にモンド・グロッソの決勝で弟を誘拐された。もし、男で強

ければ本人が狙われるかも知れない。彼には彼女の弟の用に後ろ盾など無い。だからこそ彼女は無理矢理にでも彼に戦鬪をさせ実力が無いという事を皆に見せ彼には安全に生活してもらいたいという彼女なりの考えがあった。確かに3年間彼は蔑みの視線を受けるが弟がいる。弟なら彼と友達になつて支えるだろうと。

「彼は諦めませんよ。どんなにバカにされ、笑われてもこの世界を変えるらしいです。」

鈴木は先ほどとは違い笑いながらそう告げ本当に楽しそうに笑う。それほど桐生の言つたことが可笑しかつたらしい。

「桐生には才能が無い」

「才能は努力で覆すそうです」

「・・・無理だ」

「でしようね」

言葉とは裏腹に笑顔でそう告げる鈴木は。

「でも、出来れば世界は変わるでしようね。変えるのは先生の弟かもしれないませんが。良い試合だったみたいですね。弟さんは。では、私は彼が起きるかもしれないので部屋に戻りますね」

興味なさそうに告げ。鈴木はその場から離れ部屋に戻つて行つた。残された織斑千冬は。

「それでも、私が守れるのはこんな方法しか」

あの試合から1週間が経ちやつと日常生活が遅れるようになると。

「先生。ありがとうございます」

挨拶をして部屋から出る準備で荷物を纏め。

「次は気をつけなさいよ。桐生君は弱いんだから無茶はダメよ」

「弱いからこそ人の何倍も努力するんですよ。」

笑顔でそう言つて部屋に向かつて歩いていけると

「お。浩太もいいのか?」

「うん。もう大丈夫だよ。一夏」

一夏と篠ノ之さんが歩いてきた。

「良かったな。心配してたんだよ」

「そっか。ありがとう」

「一夏。部屋に戻るぞ」

篠ノ之さんがそう言つて部屋に引つ張つて行つた。

「ちよっ!?ほ… 箒!?待てって。浩太!?そういえばクラス代表が俺に決まったんだよ」
「え! オルコツトさんじゃないの? 一夏なの?」

一夏は篠ノ之さんの引つ張られてる腕を離して此方を向き

「ああ。セシリアが俺に譲ってクラス代表になったんだ」

「そうなんだ。おめでどう。無理しない程度に頑張つてね」

「おう。そんな優しい言葉かけてくれるの浩太だけだよ」

「一夏!!それはどういう事だ。私も言っただろ」

「箒!?落ち着け!」

二人の言い合いが長くなりそうなので僕は部屋に戻ろうと二人に声をかけて部屋に向かう。

「一夏。篠ノ之さん僕は先に部屋に向かうね。それじゃ」

そう言つて、部屋に向かう。それにしても一夏は凄いな。僕とIS搭乗時間変わらな
いはずなのにクラス代表になるなんて僕も負けられないように頑張らなくちゃ。

次の日の朝1週間ぶりに朝の訓練を終わらし、準備して教室に向かうと彼がクラスに
行くと空気が一瞬凍りつき後は何事も無かった用にまたそれぞれ話し出す。まるで彼
が居ないかのように。桐生はその空気を気にせずに席に座り準備をしていると。

「浩太。おはよう」

「おはよう。一夏」

挨拶しながら隣の席に座る一夏に

「おはようございます一夏さん」

挨拶しながら近づいてくるオルコットさん。そして少し挨拶をしていると

「ねえねえ二人とも知っている転校生の話」

「私の存在に危機感を持ったのかしら？」

オルコットさんがそう眩くと。

「なんでも中国の代表候補生らしいよ。」

また、代表候補生。

「このクラスに転校してくるわけではないのだからそれほど気にする必要もないのではないか？」

篠ノ之さんいつのまに此方に。さっきまでいなかったのに。

「そうだね。相手の事も大事だけどまずは自分の力を上げる事に集中した方が今はいいかもね。今は鍛えれば鍛えるほど力も上がるだろうし」

「そうですわ。一夏さんは私と一緒に特訓を！」

「やれるだけ頑張ろう一夏」

「おう、そうする浩太」

「やれるだけでは困りますわ！　一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男子たるものそんな弱気でどうする」

「織斑くんが勝つとみんなが幸せなんだよ」

「学食のデザート半年間フリーパスを目指しクラス一同で声援を一夏に送ると。」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表つて一組と四組だけだから余裕だよ」

「その情報、古いよ」

その声に振り返るとツインテールに小柄な女の子が胸を張ってこつちを見ていた。

「鈴？お前、鈴か!？」

「そう、中国代表候補生、凰・鈴音。宣戦布告を言いに来たつてわけ」

ツインテールを揺らしながら自信に満ち溢れた表情で宣言してるけど。知り合いな

のかな？

「なにかつこつつけているんだ、鈴。似合わないぞ」

「な!?!　なんてこと言うのよ一夏!」

一夏君の言葉に威嚇するように顔全体で怒りをあらわしている。

「おい」

「なによ!?!」

振り向いた瞬間に彼女の頭に衝撃と共に有難いお説教が。出席簿で叩くのに何であんな音が・・・

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ。あと邪魔だ」

「す、すみません。とりあえず一夏！昼に食堂で待つてるからね。来なさいよ!!」

凄いな。そう言うとの女の子は戻っていった。行動力あるな。

「おい！一夏さっきの女子はいったい誰だ？ずいぶんと親しそうだったな」

「そうですね、一夏さんさっきの方とはどのような関係——」

最後まで言い切ることなく3人の頭に出席簿が落とされた。今のは痛いよね。だつて出席簿で叩いてる音じゃなかったし。でも織斑先生が居るのにSHRの邪魔したら駄目だよ。

クラス対抗戦

「すごい!?一夏君はあそこまでI Sを動かせるなんて」

一夏君と凰さんのクラス対抗戦をモニター室での観戦を許可されて観ているけど。溜息が漏れる。I Sを自由に動かし今も凰さんが動かしている甲龍と高速での格闘戦を行っている。甲龍の装備武装双天牙月を右手に構えて振り振りながら一夏に迫るが一夏も何とか距離を取ろうと上下左右に動きながら後ろへ下がるが凰さんもキツチリとついて行き。このままじゃジリ貧で一夏が削られるかなと思っていると。

「——甘いつ!!」

その言葉と共に、凰さんの右肩が光ったかと思うと一夏の白式が後方へ飛ばされた。

「今のはジャブだからね」

その言葉が終わると今度は両肩が光、先ほどよりも強い音と共に地面へ叩きつけられた。

『衝撃砲』

どうやら山田先生の説明によれば第三世代兵器で、空間自体に圧力をかけ砲身を打ち出す武器。砲身の稼動限界角度はなく、説明を聞く限り死角は無さそうで凄い。その説

明の間も一夏は懸命に動き回りハイパーセンサーを駆使して回避に専念している。

「よいかわすじやない。衝撃砲《龍砲》は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」

笑顔で嵐さんはそう告げるけど一夏は答ええない。必死に勝つ方法を考えているのかな。頑張れ一夏。

「鈴」

「なこよ？」

「本気でいくからな」

そう言った一夏の顔は、真剣で何かするのか。

「な、なによ。そんなの当たり前じゃない……とにかく、格の違いってのを見せてあげるわよ！」

嵐さんは双天牙月を構えなおして一夏に迫りながら衝撃砲を撃つけど一夏は何か狙っているのか。

「織斑君。何かするつもりですね」

山田先生の疑問に。織斑先生が

「『瞬時加速』だろう。私が教えた」

「瞬時加速？」

オルコットさんの疑問を

「一瞬でトップスピードを出し。敵に接近する奇襲攻撃だ。出し所さえ間違えなければアイツでも代表候補生とも渡り合える。しかし・・・通用するのは・・・一回だけだ」

なるほど、織斑先生の言う通り先ほどから刀しか武装も無い一夏君にはあう方法だ。そうして、逃げながら隙を伺っていた一夏は衝撃砲を凰さんの後ろ移動しその一瞬の隙に一瞬時加速を使い凰さんに後一步という所まで近づいた時に。

ズドオオオオオオンツ!!!

声援と歓声に彩られていたアリーナに衝撃と轟音が響き静寂に包まれる。試合を即時中止し、システムが破損し遮断シールドを破って何者かが侵入してきた。真つ黒なフルスキン装甲に長い両腕、頭部に複数のモニターと不審度満点ISが乱入し急いで3年生の人達が非難を誘導し。山田先生が一夏達にアリーナから非難するように言うが一夏は皆が非難するまで時間を稼ぐと断っている。山田先生の必死の呼びかけも繋がらずなおも呼びかけるが・・・

「本人達がやると言っているのだから。やらせてみてもいいだろう」

織斑先生のその言葉に山田先生が普段とは違って凄いい勢いで食って掛るが。

「落ちて着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラする」

その言葉を吐きながら塩入りのコーヒーを飲もうとした織斑先生に砂糖と塩が逆と指摘をし。今何が出来るか探して考え、オルコットさんが織斑先生に出撃許可を求めめる声が聞こえ。

「そうしたい所だが。これを見る」

「遮断シールドがレベル4に設定」

「しかも、扉が全てロックされて」

「そのようだ。これでは非難することも救助に向かうことも出来ないな」

篠ノ之さんとオルコットさんの言葉で画面をみてみるとどうやら非難も救出も出来ないらしい。既に緊急事態として政府に助勢を要請し3年生の精鋭部隊がシステムクラックを実行。学園は打てる手を全て打ち。後は一夏と嵐さんに時間を稼いで貰うのが最善らしい。それも後数十分が限界だろう。それ以上は一夏達が落とされてしまう。

アリーナ上空では一夏と嵐の戦闘は激戦が続き。先ほどから嵐の衝撃砲での隙を作つての一夏の瞬時加速からの突撃は4回目も失敗に終わる。一夏の白式のエネルギーギョーも減つて行く。二人は何か会話を交わし

「なあ。鈴。あいつの動きって機械じみて無いか？」

「何言ってるのよ。ISは機械じゃない」

「そういうんじゃないよ」

「そういえば。あれ、さつきから私達が会話してる時は余り攻撃してこないわね。まるで私達に興味があるように」

「だろ。仮に無人機ならどうだ？」

「何？無人機なら勝てるっていうの？」

「ああ。無人機なら全力で攻撃できるからな。零落白夜で」

「零落白夜だかなんだか知らないけど。その攻撃自体当たらないじゃない」

「次は当てる。」

「ふう。言い切ったわね。じゃあ。そんな事あり得ないけど、あれが無人機だと仮定して攻めましょうか」

「よし。じゃあ俺が合図したらあいつに向かって衝撃砲を撃つてくれ。最大出力で」

二人の会話最中も正体不明のISは動かず、二人の会話も終わり作戦も決まって今からという時に。

「一夏!!」

一人の少女の声が響き

「男なら!!男ならその位の敵に勝てなくて何とする!!」

ピットのの上から生身で一夏に大声で声を張り上げた。正体不明のISはすぐさま対象を箒い移し砲身を箒へ向けた。

「箒!!つくそお、鈴!?!」

「!!ええい、もおーッ!どうなっても知らないよ」

その言葉と共にエネルギー全開で衝撃砲を充填しその射撃先にいる

「撃て!!」

一夏の言葉に、凰が衝撃砲を最大威力で発射され。一夏の背中に衝撃砲が直撃し轟音と共に激しい衝撃により声が漏れ痛みに耐えながらも。白式のエネルギーのバーが急速に上昇し。

『エネルギー充電率90%到達ーワンオフアピリティー』『零落白夜』使用可能』

『雪片式型』よりも一回り大きな刀が現れ。

「おおおおおお!!」

叫び声と共に零落白夜を振り被り彼のもう一つの武器である一瞬で間合いを詰める瞬時加速で一気に近づき零落白夜を振り下ろす。音を立てて相手の腕を落とし、手ごたえを感じる一夏だが同時に衝撃を感じ体を吹き飛ばされる。吹き飛ばされるに正体不明のISは痛みを感じていないかのようにもう片方の腕で白式を最初に自分が落ちて

きたクレーターへ白式を吹き飛ばし彼に照準を合わせたまま近づくが。

「狙いは？」

「完璧ですわ」

その答えと同時に展開された4基のビットが正体不明ISを連続で打ち抜き体勢を狂わし。

「セシリア！決めろ!!」

「了解ですわ！」

スターライトmkⅢを即座に構え鈍くなった相手に対しその中心部分を打ち抜く。正体不明のISは腹部を打ち抜かれ後方へ倒れ煙で見えなくなり戦闘が終わったと気を抜いた瞬間に一夏は敵ISにロックオンされ敵ISの左手にはエネルギーが充電されその先には一夏がターゲットにされている。一夏はすぐさま駆け抜け。敵ISにそのまま突っ込んで行った。

凄い。僕と同じ位しか稼働時間が無いのにあの戦闘技術。最初は凰さんの見えない衝撃砲に苦戦していたのに途中からは格闘技術も互角に近く衝撃砲には確実に交わせるぐらいに。そして『瞬時加速』あれを、僕は防ぐ方法が無い。

「織斑先生。織斑君は何日で瞬時加速を覚えたんでしょうか？」

「桐生。聞いてどうするんだ。貴様が例え覚えても有効に使えない。先ほども言った様にあれが通用するのは1回だけ。その1回で相手を倒せないと意味が無い。桐生。お前にはその1回で倒す方法が無い。諦めろ」

「いえ。あの・・・何日で覚えたかを・・・僕が使えても意味が無いのは解っているのです。」
「1週間だ」

「一夏は天才？あのバリア無効攻撃と瞬時加速。この2つを上手く使えば初見の相手限定なら織斑先生の言うように良い試合所か勝てる可能性もある。羨ましい・・・僕にもその半分でも才能がありもつと上手く動かせれば。僕が入院してる間にそんなあつさりと覚えられるなんて・・・追い付かないと。」

「山田先生。山田先生は学生時代ラファール・リヴァイヴに乗っていたんですよね？」
大きく息を吐いて山田先生に聞き。

「あ、はい。そうですよ」

「僕に、ラファール・リヴァイヴの操作を教えて貰えないでしょうか？」

「わ・・・私ですか？」

「はい。鈴木先生に聞きました。山田先生は元日本代表候補でラファール・リヴァイヴに乗っていたと。織斑先生が乗っていた機体は暮桜。僕は格闘は出来ないので教わる

なら山田先生が一番良いと思うのですが駄目でしょうか？」

「まっつてください!?!私も「いいだろう」織斑先生!?!」

「桐生の言う事も間違いでは無い。放課後から門限までの暇な時間なら教えてもいいんでは?補習だと思えばいい」

「うゝ。解りました。桐生君。宜しくお願いしますね」

織斑先生の援護射撃もあり、何とか山田先生に教わる事が出来る事になる。これで少しは動かせるようになるかな。

「桐生。ではお前も戻れ」

「はい。失礼します」

明日から頑張ろう。少しでも追い付けるように。一夏君もあれだけ出来るんだから。

「織斑先生、いいんですか?」

「桐生の事か?この3年間は自由にしてもいいだろう。山田先生・彼のことは頼む」

その言葉と共に織斑千冬はこの話は終わりとコーヒーを口に運び口を嚙む。つい先日鈴木幸恵に言われた言葉(生きててもこのままならモルモット、現実をみせても諦めない心)故に彼女は彼にせめてもの自由をこの3年間与えようと彼の要望を後押しし

た。彼がその努力の先に届かない壁を見て絶望して諦めるか最後まで努力を続けるのか。どちらにしる彼女は最後まで見ようと決意する。教師としては失格でも諦めて欲しいと思いつながら。彼女は今日も鉄の仮面を被り。

学年別トーナメント

クラス対抗戦が終わってからアリーナでは毎日山田先生と桐生の二人は放課後に門限までの間ラファール・リヴァイヴでの戦闘訓練を行っていた。彼女が一番初めに教えた事はI Sでの射撃に必要な『空間認識能力』『先読み』『並列同時思考』この3つとI Sでの射撃の基礎。3発目には当てる射撃。I Sの高速機動とハイパーセンサーにより1発目で当てるには簡単ではなく。回避方向を誘導しての射撃訓練を優先的に鍛えられていた。

もちろんI Sが乗れない時や一人の時等は。先ほどの3つの能力を鍛える為に。5〜7m先に目印をつけて目印までの距離や空間を確認し、目を閉じたまま歩き、目印の位置まで移動するというのを繰り返したり。本を2冊同時に読むというトレーニング。I S学園に居る生徒のI S情報と武装、戦闘の傾向をノートに書き記したりをずっと繰り返していた。

彼はずっとトレーニングを繰り返していたが彼の周りでは織斑一夏と比較され、男でありながら専用機を持ち初心者でありながら代表候補生と良い試合をし、普段は社交的だが自分の通したい事は意地でも通すのを見て男らしいと高評価の一夏とは違い。

専用機も無く代表候補生には何も出来ず最後には降参しようとした。試合も最後まで断つて逃げようとしたと最初に期待値が高かっただけに落胆され今では彼に話しかける人物は織斑一夏以外は居らず。また彼もそこまで気にしている暇が無く毎日を過ごしていた。

そうして一ヶ月ほど過ごしていると

「諸君、おはよう」

その挨拶と共にクラスの空気を変えながら入ってきた織斑千冬の後ろから
「皆さん、おはようございます」

山田真耶も挨拶をし。

「山田先生、HRを」

「は、はいっ」

「ええとですね・・・今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

転校生の紹介にクラス中がざわめき始めたが

「失礼します」

その言葉と共に入っていた転校生を見ると今度は静かになり

「シャルル・デュノアです。フランスからきました。この国では不慣れなことも多いか

と思いますが、みなさんよろしくお願いします」

金髪で中性的な顔をした男、シャルル・デュノアがそう微笑みながら挨拶すると、静かに固まったままのクラスは

「お、男……？」

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国から転入を——」

最後まで言葉を言えずにクラス中で叫び声が聞こえ

「「キターーッ!!!」」

「男子!!三人目!!」

「しかもうちのクラス!」

「美形!守ってあげたくなる系!」

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

彼女が止めるまで騒ぎ続け

もう一人の転校生は銀髪にそして左目の眼帯が目を引き今までずっと無言で腕を組んで織斑千冬の方を向いている。

「……挨拶しろ、ラウラ。」

「はい、教官」

その返事と共に姿勢を正し

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました。」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

その一言で挨拶が終わり。クラスが先ほどとは違う意味で空気が凍りつく中彼女は目的の人物を見つけたのか織斑一夏の前まで歩いて行き腕を振り上げ

「!!貴様が——」

振り上げた腕を下ろして綺麗な平手打ちを彼の頬に叩き込むという挨拶を交わし。そこから一夏も叩かれたことに気づき言いあいから喧嘩になろうかと言う時

「・お前から静かにしろ。ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散!」

教室の空気を一変し、必要な事を伝え終わると出て行き。男性3人は第2アリーナの更衣室へと走って行った。

上空ではセシリア・オルコットと凰鈴音に山田真耶は1vs2でありながら二人の行

動を読みながら常に一定の距離を開け。近づいたら離れ離れたら近づき自分の距離で戦い。射撃で牽制しながら連携を出来なくして。最後には二人が回避しようと動いた先に二人がぶつかった所をアサルトライフルからグレネードへ切り替え二人を打ち落とすとした。

桐生はその戦闘をデユノアの I S 説明を聞きながら自分の目指す I S 戦闘を見た。これ以後、彼は常に山田真耶ならどう動くかどう回避させどううち落とすかを考えながら I S に乗る。

「さて、これで諸君にも I S 学園教員の實力は理解できただろう。

以後は敬意を持って接するように・・・

ではこれより実習を開始する。

専用機持ちはグループリーダーをしろ。

他の者は出席番号順にそれぞれのグループに均等に別れる」

この合同訓練で桐生は自分の目指す方向性を見つけより訓練に励むことになる。

いつでもどおりのトレーニングに今日もアリーナへ向かっている桐生は通りすぎる女の子達の

「第三アリーナで専用機持ち3人の模擬戦やつてるよ」という声を聞き第三アリーナへ行くとすでにそこではラウラ・ボーデヴィツヒとセシリア・オルコットと凰鈴音との戦闘最中であつた。正確にはラウラ・ボーデヴィツヒ一人で一方的に二人を殴っている状況で桐生はそれを呆然としながら観戦している。山田先生には負けたけどもオルコットも凰も代表候補生なだけに全く弱いとは言いい切れない二人を一方的に相手している所から彼女の実力が頭一つ抜けていると考え。彼女の武装や戦い方をチェックしていると彼の横で同じく観戦して居た一夏が白式を展開しアリーナのバリアを壊して乱入。さらにはシャルルも乱入し最後には織斑千冬が生身のままIS武装してラウラ・ボーデヴィツヒの攻撃を受け止めるといふ目を疑う行為でこの模擬戦は終了した。

その後学年別トーナメントが二人一組というのを知ったクラスメイトが一夏とシャルルに殺到したが一夏はシャルルと組むという事を聞き。オルコットと凰は全力で一夏達を応援する事となる。

学年別トーナメント。例年より慌ただしく大勢の来賓を向かえ。生徒も教師も忙しく動き回っていた。やっとそれから開放された生徒達は更衣室に行つて着替えて準備

をしていた。

桐生と組む事になったのはラウラ・ボーデヴィツヒ。桐生はその人気の無さから誰とも組む事が出来なかつたのとラウラ・ボーデヴィツヒは誰も寄せ付けない性格とあの模擬戦を見て怖くなり誰も組まなかつたという残り物通しのペアで挑むことになった。準備が終わつた桐生はペアを組む事になったボーデヴィツヒに挨拶をし。

「宜しくね。ボーデヴィツヒさん」

「桐生。私の邪魔だけはするな」

「うん。邪魔しないように頑張るよ」

ボーデヴィツヒは最初から桐生の力を当てにしておらず、桐生も最初から自分が役に立つと思っていない。毎日夜中までトレーニングをしているとはいえ。彼が出来ることは人並みの射撃のみなので大人しくボーデヴィツヒさんのやりたいようにさせようとサポートに徹する事に決めていた。

そんな二人の対戦相手はモニターがトーナメント表に切り変わり表示され『一夏・シャルル』のペアとの対戦だった。ボーデヴィツヒは嬉しそうに笑い。桐生はじつとモニターを見て考えていた。



試合開始と同時に一夏はボーデヴィツヒへ先制攻撃をしかけるがA I Cで防がれデユノアはアサルトカノンで桐生を攻撃と同時に後退し牽制しながらA I Cで止められた一夏を救出の為に高速切替での連装ショットガンで一夏を救出する。一夏対ボーデヴィツヒはボーデヴィツヒの方が技量は上回っているが一夏は最初から耐える事を狙いまた決定的なピンチにはデユノアがカバーすることによって効果的なダメージを与えることが出来ず。逆に桐生対デユノアでは連装ショットガンをばら撒きながら近づき近接ブレードで切り付け確実にシールドエネルギーを減らして行く。桐生は少しでも被害を抑えようと左右に動くがデユノアの精確な射撃で出足を止められ近づいてのブレードを防ぐ術がなくやられていく。このままでは一番先に落ちるのは桐生だろうと誰もが思っている。唐突に桐生はアサルトライフルを構えシャルルを狙う。シャルルはそれを避けようとしたがやめてそのまま受ける。

「デユノアさん。僕もただでは負けないよ。何もしてこなかったわけじゃないから。」

「くっ・早く一夏を助けないとなのにな」

その射線の先にA I Cで止められた一夏がいたからだ。桐生はずっと攻撃を受けながらボーデヴィツヒの行動を見ていた。彼女がA I Cを使うときに動かないことから

近接攻撃しか無い一夏が止められる事にも気づき。格上のデユノアに攻撃を当てるにはこの方法しか無いと無様に避けながら射線上まで誘導し避けれない状況に追いやつた。ずっと我慢して受け。状況を認識し。無様にも動き回った結果攻撃を当てた。

「私の邪魔をするな」

だがボーデヴィツヒも彼の狙いに気づき。邪魔をしたと判断しワイヤーを彼に巻きつけ後方へ追いやり。それを見たデユノアが彼に一気に近づき近接ブレードでシールドエネルギーを0にした。

1対2に成った事でそれまで優位に立っていたボーデヴィツヒは一夏とデユノアのコンビに対処が出来なくなった。AICでどちらかを止めればどちらかが攻撃をするという状況によりシールドエネルギーを減らされて行き焦ったボーデヴィツヒが無理に勝負を掛けAICで止めた一夏に止めをさそうとした所を。

一夏の真横から出てきたデユノアの六九口径パイルバンカー『灰色の鱗殻』を打ち込まれ撃墜され。試合終了と思った時。

突如。

「ああああああっ!!!」

ラウラ・ボーデヴィツヒが身を裂かんばかりの絶叫をする。シュヴァルツェア・レーゲンの装甲が溶け、ラウラ・ボーデヴィツヒを包み込む。

「あれは・・・何?」

装甲が溶け液状化した何かはそのまま動きながら地面に降り形を整えてゆき黒い全身装甲のISらしき物になった。桐生はそれをぼうっと見ていたが、ISらしきものは桐生に気づき、一気に近づき片手に持っていた近接ブレードで切りかかってきた。かろうじて上半身を捻るが完全には回避できず、右腕とIS装甲をきられ、血が滴り落ちる。右腕の痛みは今すぐでも気を失いたいが失ったら死ぬかもしれない気をしつかり持ちこの先のことを考えていると。

「うおおおっ!!」

一夏は叫びながら残りわずかなエネルギーで雪片式型を展開し切りかかるもいなされて逆にピンチを招きデュノアの援護で距離をとる。

一夏とデュノア。そして何故か下りてきた篠ノ之 箒の3人との会話を聞きながら桐生は一夏に激しく恐怖を抱く。彼が怒っているのは織斑千冬のデータを使ったから。彼女のデータは彼女の物。あの正体不明のISを放置すれば危険だから倒すんじゃない。織斑千冬のデータを使ったあのISを殴りたいから殴るという行為。これが日常でならない。だが、今は正体不明のISみたいな何か。もし織斑一夏がISに乗っている時に切れれば。そんな事を考えていると一夏はシャルルからエネルギーを貰いISを一極限定モードに展開し白式を起動、右腕装甲で。

一夏はI Sみたいな物に突撃し袈裟斬りを弾き近接ブレードを上空に構え勢いよく振り下ろしたと同時に桐生は痛みにより気を失った。

後に桐生はあれがV Tシステムだと知る。そのシステムを彼はきちんと聞いた時決意する。

嘘つき

ハワイ沖の上空で一機のラフアール・リヴァイヴを6機のI Sが周りを固めその内の1機のI Sとラフアール・リヴァイヴが会話をしている。

「浩太!? バカな事はやめろ」

「バカな事は一夏だろ。本当にあのI Sの意味解ってる? あれはこの世にあつてはいけないんだよ!」

「あれは箒のだろ。何で浩太が決めるんだよ。殺そうとするんだよ。」

「彼女が篠ノ之束の妹だからさ。彼女から確認したんだけどあのI S電話して貰ったそうだよ? さらに一夏が怪我した時はもう乗らないと言ったり最後にはあの暴走したI Sと一夏が来るまで一人で相手してエネルギー回復だよ。無尽蔵に動けるI Sがたった一人の精神状態で動けるのは危険じゃない?」

「箒は暴走なんかしない。俺は箒を信じる!!」

その言葉を聞いた桐生が笑ったのを誰も気づかず。

「確かに一夏が居たら会話しないかも知れない。だけど・一夏。君が暴走するかもしれない。学年別トーナメントの時みたいに。あの時、一夏は言ったよね? 『千冬姉のデー

「夕は千冬姉の物。俺が殴りたいから殴る。」一夏はあの時皆を危険から守ろうとしたけども無い。ただ一夏は自分のしたいようにしか。自分の好きな者しか守らない。普通の人ならそれでいいと思う。けどISに乗れる人は。ましてや専用機持ちがそれじゃ独裁じゃない。誰も一夏に逆らえないよ。」

「そんな事ない。俺は独裁なんかしない。」

「現にあの時は教師の制止振り切ったよね。少なくとも一夏の隣にいる皆は一夏の言う通りにすると思うよ。気この時点で専用機6機、しかも篠ノ之さんがいるからエネルギー無限で一国落とせそうだよ。白騎士だけで世界の空母の4割を一瞬で減らせたんだから。」

桐生は大きく息を吐き。確認するように一夏に語りかけ。

「・・・僕はね。一夏も僕と一緒に女尊男卑を壊し男性の地位を回復する為に頑張っている。勝手に思っていたんだ。少なくとも僕はそうだった。だから、どんなにバカにされようと。蔑まれようと頑張った。ISに乗れると解った時から誰よりも早くおきて誰よりも遅く寝て努力したし参考書や教科書。この学園にいるIS搭乗者の戦闘ビデオ等を誰よりも見て勉強した。それも全部この世界を変えたいと思ったから。なに。何で・・・何で僕じゃなく一夏なのかな!?どんなに努力しても一向に上手くならず、それでも変えようと・・・けどね、一夏は違ってたんだね。一夏は今の世界に満足している

んだよね。だって僕に言ったもんね。『このISで千冬姉や箒、鈴。俺が守りたい人を守れるって』一夏と僕は守りたいものが違うんだよ。僕が守りたいのは男性が媚びた笑いをしなくていい普通に笑える世界だ。」

そういつて桐生は距離を取る。そして。

「ああああああ!!!」

叫び声を上げながらラファール・リヴァイヴの装甲が溶けていく。そう、桐生は最初から自分が勝てるとは思っていなかった。自分の才能に絶望し。それでも、何とかしようとした彼はVTシステムを乗せる事を思いつく。

学年別トーナメント以降彼は首相に連絡しドイツからVTシステムのデータを貰う。表向き日本は白騎士事件以降某国に圧力掛けられてIS学園を作らせられ世界に良い様にされているが白騎士一機であれだけの戦力、ましてや人類最強の織斑千冬。人類最狂の篠ノ之束等がいる日本を世界が無碍に出来るわけもなくVTシステムのデータを手に入れた。さらには完全にデータ通りに動かせるように自分の脳の神経を弄り起動と同時に脳のリミッターを切る手術も受け。こうして彼の唯一の切り札を手に入れた。だが彼はこれを今すぐ使うつもりは無く。一夏の才能と考え方に勝手に絶望した彼が3年間でも追い付けずに居た時に最後に使おうとしていた。

だが臨海学校での暴走ISとの戦闘でみせた篠ノ之箒のみせたIS。

攻撃・防御・機動のあらゆる状況に即応することが出来る展開装甲。そして、紅椿の単一仕様能力、少ない残量のエネルギーを増幅して一気にフル状態。更には接触するだけでエネルギー提供出来るというこの性能に彼は恐怖した。もしこの機体を複数作られば。男性の立場は完全に今よりも低くなる。搭乗者の疲労以外止められない兵器等どうしようもない。

故に彼はたった一人でISを破壊しようとVTシステムを起動させた。自分の命をつ捨てる覚悟でもう一つの切り札も平行して切った・・・



「彼が起動させたみたいです。」

電話を受けた秘書官と思わしき男性が振り返りながら男性に報告をすると。

「現場に向かわせろ。それと、連絡していつでも流せるように準備さしとくんんだ」

「解りました。しかし、いいのですか？最初のシナリオとは違いますか」

「織斑 一夏・彼の『守る』を読み間違えたな。あれでは旗頭にはならん。だが彼次第ではこのままでもいい。後は・・・立ち上がるか、膝を屈するか」

椅子に深々と座り疲れの籠った溜息を吐きながら彼はこのまま成功するのか失敗す

るのか後は世界に投げ掛けた。自分の読みが外れた事で一人の少年の命を使ってしまった事を後悔しながら。



桐生はすぐに自分の意識が無くなっていた。脳のリミッターが切れた事により筋断裂等を起こしながら一夏達に迫り、常人では出せない筋力と反射神経により6人を相手していた。更には一夏達は当初、データは織斑千冬だと思っていたが。データは山田真耶だった。そのデータも学園で常に教えて貰っていたデータを送り更には学園時代から彼女の事を知り今も学園に居て彼女のデータを送れる人物、鈴木幸恵も協力していた。こうして。射撃、格闘と両方いける彼女により連携を狂わされた一夏達は苦戦していた。だが元々。短期決戦じゃないと桐生本体の体もたまず。

「くそ。何だよこれ。このままじゃ。ラウラ!!」

「任せろ!」

距離を取っていたラウラ・ボーデヴィツヒが発射した80口径レールカノンが直撃す

るが逆にアサルトカノンで狙われるも

「させないよ!」

《ガーデン・カーテン》シャルル・デュノアが守り。さらに桐生の背中に衝撃が走る
「舐めるんじゃないわよ!!」

凰鈴音の衝撃砲で体勢を崩し。

「逃がしませんわ」

4基のビット攻撃で足止めされ。

「一夏。受け取れ」

篠ノ之箒からエネルギーを受け取った一夏が。零落白夜を構え。

白式第二形態移行からの4基のウィングスラスターからの二段階瞬時加速を使い一
気に間合いを詰め

「うおおお!!」

叫び声を上げ大きく振り被った零落白夜を一気に振り下ろし綺麗に桐生の乗っていた
ISを切り桐生はVTシステムからでてきた。

だが彼は全身が軽度の差はあれ筋断裂を起こしておりこのまま墜落しそうになるの
を一夏が支え地上に降ろした。

地上に居りるとすぐに鈴木先生が現れ彼の症状を見ると同時に首を横に振り一夏達

も何かを言う前に。

「せ．．．せん．．．せい．．．かえれた．．．かな．．．？」

「君には無理だと言ったろ？才能が無いと」

「さ．．．さつき「さつきの会話と戦闘なら中継されてあるさ。君の負ける所も全部ね。勝たないと駄目だよ。」そうですね．．．」

「君が危惧した気持ちには解る。だけど、変わる確率は五分だ。ISを危険と理解し。IS搭乗者達に首輪がつく確立はね。」

「そ．．．それでも．．．むだじゃ．．．ない．．．はんぶんも．．．かく．．．りつが．．．ある．．．せんせい．．．せかいが．．．かわったら．．．おしえてくれますか．．．？」

「面倒なんだけどね。」

「そ．．．う「だけど、特別にそのときは報告してやろう」あり．．．がとう．．．ごさい．．．ます」

「やれることはやったのに悔しきしかありません．．．」

「なら、もう寝ろ」

「．．．はい」

桐生と鈴木幸恵の会話に誰一人会話を挟めず織斑千冬すら彼のもう一つの切り札を聞きそこまでするのかと黙って自体を眺めていた。

彼のもう一つの切り札。脳の手術をする時に体内にマイクを埋め込み片目を義眼にし彼の見て聞いた物を録音しようとした。

彼がいきなりこんな風に全世界に対して発信しようと思わず。情報目的からかけ離れた使用方法となり全世界では彼と一夏達の全会話の世界に流れ、IS戦闘も流れた。全世界はISがここまで進化しているとは思わず。どこかスポーツ感覚で見ている人は本気でISが数機揃えば国を落とせると理解した。彼が自分の命を使つてまでISの危険性を訴え、世界が変われと願った結果。

く墓地く

一人20代半ばの女性が黒い服に身を包みたった一つしか無い墓の前で語りかける。「約束だったな。世界は変わったよ。君の言うとおり世の男性は死んでいなかった。ISの危険性を理解し。男性も女性もISには敏感になりIS搭乗者を管理することに

賛成したよ。」

「鈴木先生か。」

「織斑先生ですか。先生もここに？」

「もう、先生じゃないので先生をつけなくていい。また、嘘を？」

「はい。約束しましたから。世界が変われば報告をする」と

「なら、変わってないのに、来なくてもいいんでは？」

「私は、嘘つきですから。．．．解っていた事なのに．．．私が気に入る子は死んで行く
と．．．」

「それは、I Sに乗るのをやめた事と関係が？」

織斑千冬はずっと不思議だった。あの事件以降世界は変わらさずいや、逆に世の女性達
がより一層権力を求めて桐生の行動を弾圧した。今世紀最大のテロリストと。逆に一
夏達6人はテロから世界を救った英雄と。世の男性達はそれに声を上げず膝を屈した。
少しでも反対すれば逮捕され刑務所行きになるからだ。世の女性政治家達は逸早く動
くことで首輪を付けられる前に行動して世界を掴んだ。

今やこの墓に来る人等いない。墓をここに作られた当初は落書きや卵等を放り投げ
られ最低だったのを彼女がやめさせたのだ。彼女は学園をやめ。I Sとは関わりの無
い生活を始めた。学園を辞める時止められたが、弟が好きな事をすればいいと言った事

でやめる事ができ。弟の発言は今や彼女の発言力以上の物を持つようになった。

そう、世界は変わってないのに、何故彼女は世界が変わったなどと

「昔、いたんです。もう一人、世界を変えたいと言った人が。その人は当時、自衛隊に居ました。ISが出てきてからも自衛隊を辞めず。いつか自衛隊の力が必要になる。ISが全てじゃないと。」

織斑先生。IS出てきてから増えた物知っていますか？」

「いや。何だ？」

「某A国に対するテロです。戦闘機207機、巡洋艦7隻、空母5隻、監視衛星8基。これだけの戦力を一気に無くした状態をテロが見逃すと思えますか？確実にテロは活発になります。なのに、防衛費はほとんどIS開発費へ持っていかれる。困った某A国はこんなマツチポンプを起こした人物のいる国に責任を取らず事を思いつく。」

「ま・・・まさか・・・」

「その人は殺されました。いつか世界は元に戻る。俺達が必要な時はくる。今はみんなISが珍しいだけだと言って大多数の人を守っている本人達が蔑ろにされ蔑まれても誇りを持って守っていました。私はそんな事を知らず。IS適正が高いからと喜んで乗っていました。自分の好きな人が死ぬ原因になった物を。」

「だが。それは・・・」

「えー。完璧な八つ当たりです。だから私はこの話を誰にもした事は無いし。これからもしません。だけど、それでもISは許せない。そして、彼を応援してしまった自分も許せない。余りにも真っ直ぐだったから。努力をし。挫折をし。才能を呪い。最後にはVTシステムまで使うとは」

「だが、死んでは意味など無い。大ばか者だ」

「彼に取っては死んだ方がいいですよ。生きてたら壊れてしまう。皆が彼を恨む。だから死んだ方がゆつくりできる。もう何もなくなっていいと。だから私だけは毎日彼に嘘をつくんですよ。……世界は変わったと。織斑さんは何故ここに？」

「解らない……ここに来るまではいつも言いたい事がある。何故あんな事を？私に何故相談しなかった？私を恨んでいるか？等……だがここに来るとそんな事が消える。私は間違っていたのだらうか……桐生の命の為に絶望させようとしたが私にはあいつの気持ちも少し解る。だから3年間の努力なら手伝おうとしたがその結果死んだ。何も変わらないままに」

「だから、彼の努力は無駄だったと？」

「そんな事は無い!?!少なくとも私は認める。誰よりも努力したのを見ていた。だからこそなお才能が無いのが良かったのか悪かったのか。」

「そうですね。それは私にも解りません。才能が無いから努力したのか。あつたら努力

しないのか。けど、ただ解るのはあの彼だったから私は今、彼に嘘をつく。織斑さんも彼の事気に入ってるなら大変ですね。」

「何故だ？」

「彼ほどの男居ませんよ？あれほど目的のためだけに走る男いませんよ。文字通り命がけで頑張りますから。この時代の男ではいませぬね」

そう少しだけ泣き声で鈴木が告げ。彼女はこの墓を後にしようと

「では、私は先に帰りますので、後は二人でどうぞ。」

織斑千冬に声をかけさっていった。残された彼女は

「女二人に思われるなど男冥利に尽きるな」

また、寂しそうにそう告げ

「世界は変わったぞ・・・ばか者」

彼女もまた、明日来るときっていった